様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３１９６

研究課題名（和文）多様な場面における参照の相互認識達成のための方略の研究

研究課題名（英文）On the strategies for mutual understanding of references in conversations

研究代表者
川端　良子（KAWABATA, Yoshiko）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・音声言語研究領域・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：５０７０５０４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主に『日本語地図課題対話コーパス』を用いて、対象が最初に会話に導入される際の言語表現を定量的に分析し、参照表現の使用傾向とその要因について検討を行った。その成果として次の3つの結果を得た。それは、(1) 参照を特徴付けるアノテーション方法の開発、(2) 参照時の引用形式の使用に関する従来理論の精緻化、(3) 参照を含む発話中に、聞き手によって行なわれる相槌の出現傾向とその機能の説明、である。これらの成果は、参照による相互理解達成のための多様な方略の使用実態の一部を明らかにしたものといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来研究では、複数の参照方略が存在することが明らかにされてきた。ただし、それぞれの方略がどのような状況において用いられるのかという問題については議論されてこなかった。たとえば、参照を成功させる確実な方法は、相手に対して対象に関する知識を尋ねることであるが、この方法は、会話の進行性を損ねたり、相手に対して失礼にあたる可能性がある。そのため、会話の参加者は状況に応じて適切な参照方略を選択する必要がある。本研究は、コーパスを用いて、参照における言語活動の多様性を明らかにした。この成果は、人の言語活動の実態解明という学術的課題の進展に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：In the present research, we quantitatively investigated linguistic expressions when the object was first introduced into the conversation. We analyzed what and how people express references using the "Japanese Map Task Dialogue Corpus."
The results were as follows: we (1) developed an annotation method that characterizes the reference expression; (2) refined the conventional theory regarding usages of citation formats; (3) revealed the tendency that non-primary speakers make Aizuchi when the primary speakers introduce an object into the conversation; (4) explained that one of the functions of Aizuchi is to develop the mutual understanding of references.

研究分野：コーパス言語学

キーワード：参照表現

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

会話で話し手が特定の対象を参照(reference)するとき、話し手が参照した対象と同一の対象を聞き手が認識することは、話し手と聞き手の両者の課題である。この話し手・聞き手間の相互参照認識という課題を会話参加者がどのように達成しているかについて、これまで様々な方略の存在が報告されてきた。一つは修飾語を追加する方法である。たとえば田中という人物を参照する際、「文学部の田中」等の表現を用いることで対象を限定することができる。また、「という+名詞」等の形式の有無により話し手と聞き手が相互に知っている対象か一方のみが知っている対象かを示す方法も知られている(田窪[1])。聞き手が参照対象を認識できるかどうかを話し手が事前に確認する方法も複数報告されている。Sacks & Schegloff [2] は、参照表現の末尾を上昇調のイントネーションで発話した後、ポーズをおいて聞き手の反応を伺う方法(トライマーカー)が会話で広く観察されると述べている。串田[3]は、参照の事前の確認では「~知ってる?」「~ありますよね」のような確認表現が用いられることを指摘している。このように複数の方略が報告されているが、個々の状況でどの方略が使用されるかに関する研究は行われていなかった。

２．研究の目的

(1) これまでの研究の多くは、特定の場面で観察された少数の事例、もしくは研究者の主観に基づいた理論的なものであり、実際の言語活動を対象にした定量的な分析は十分ではない。そこで、多様な状況下で、参照が実際にどのような言語的・非言語的方法で行われるかを明らかにすることが本研究の目的の１つである。

(2) 参照方略には、相互参照認識の確実性、会話の進行性、相手のフェースの問題などの点において、利点・欠点がある。長い修飾語の使用は相互参照認識の確実性を高めるが、回りくどく会話の進行が妨げられる。また相手が参照対象を知らない(と話し手が想定している)ことが顕在化することで、相手のフェースを潰す可能性が生じる。このように各方法には利点と欠点があるため、我々は、会話の状況や相手との関係性、会話の目的などに応じて適切な方法をその都度選んでいると考えられる。そこで、どのような要因で、参照の相互認識達成の方略は選択されるのかを明らかにすることが本研究のもう１つの目的である。

３．研究の方法

本研究では、2 種類の対話コーパスを用いて参照の言語的・非言語的活動にアノテーションを施し、そのデータを用いた定量的分析を行う。本研究で用いる対話コーパスは以下の 2 つである。

- 日本語地図課題対話コーパス(MapTask)
- 日本語日常会話コーパス(CEJC) [モニター公開版]

(1) 多様な状況下における参照の言語的特徴の解明
上述した 2 つのコーパスに対して、参照の言語形式と発話の機能の側面からアノテーションを行う。会話の基本単位として「長い発話単位」[4] を用いる。まず、会話の中で参照が生じている箇所を抽出する。次に、基本単位ごとに、発話の機能の分類を行い、アノテーションを行う。発話機能ごとに参照の前後でどのようなやりとりが行われているかを分析し、参照の方略を明らかにする。

(2) 参照の方略選択に関わる要因の解明
MapTask では、相手との関係性(親近性)や課題の習熟度に注目して参照方略の違いを分析する。CEJC では、会話相手との関係性(親子、友人等)や、会話状況、個人特性(年齢、性別等)に注目する。分析に必要なアノテーションを施したデータを用いて参照方略選択の要因について検討する。

４．研究成果

(1)
会話において対象が最初にどのように導入されるのかを MapTask コーパス を用いて分析を行い、言語活動を特徴付けするアノテーション方法を提案した。アノテーションは次の 3 つの観点から行われた。

1.発話単位の機能
2.発話の分割提示の有無
3.引用表現の有無

1 の発話単位の機能は、会話参加者の対象に関する知識、会話参加者の役割で異なる傾向が見られた。また、2 の発話の分割提示、3 の引用表現の有無は 1 の発話単位の機能と相関が見られた。このアノテーションにより，会話参加者の状況によって多様な参照方略が用いられていることを示した。

(2)
(1)において示された、対象参照時の引用表現についてさらに詳細な分析を行った。MapTask コーパスを用いて、対象が最初に会話に導入される場面だけでなく、同じ対象を複数回参照する際に、引用形式が使用されるか否か調査を行った。従来研究[1][5]では、引用形式と会話参加者の対象に対する知識との関係性が議論されており、共有知識ではない対象を指示するときには引用形式が使用されると言われてきた。しかし、本研究の結果、従来指摘されてきたような、共有知識でない対象を指示するときには引用形式を使用しなければならない、というほど強い制約は実際の会話では働いていないということが示された。また、引用形式の使用は、発話の目的や参加者間の関係の影響を受ける可能性があることが示唆された。

(3)
対象を会話に導入する際に名称の後にポーズを入れる発話を「分割提示」と名付け、ポーズの機能について詳細な分析を行った。具体的には、第 1 話者(primary speaker)による参照の分割提示に対して、第 2 話者(non-primary speaker)がどのような場合に相槌を行うのかについて分析を行い、参照の相互認識達成との関係について検討を行った。その結果、相槌の生起は、第 2 話者の心的な情報処理と、第 1 話者の発話に対する応答という 2 つの要因が影響していることが示された。そして、参照対象の分割提示と相槌というやり取りは、第 2 話者の対象に対する知識(知っている/知らない)を示す明確なサインとしては機能していないが、第 1 話者が第 2 話者の知識状態を予測することに利用されていることが示唆された。

＜引用文献＞
[1] 田窪 行則 (1989). 名詞句のモダリティ. 「日本語のモダリティ」, くろしお出版, pp. 211-233.
[2] Sacks, Harey & Schegloff, Emanuel A. (1979). Two preferences in the organization of reference to persons in conversation and their interaction. In Psathas, George (Ed.), Everyday language: Studies in ethnomethodology. Pp.15-21. New York:Irvington.
[3] 串田 秀也 (2008). 指示者が開始する認識探索-認識と進行性のやりくり-. 社会言語科学, 第 10 巻第 2 号. pp.96-108.
[4] JDRI (2017).『発話単位ラベリングマニュアル』version 2.1. http://www.jdri.org/open-data/ から入手可能
[5] 丹羽 哲也(1994). 主題提示の 「って」 と引用. 大阪市立大学文学部紀要「人文研究」, Vol.46, No.2, pp.79- 109

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Yoshiko Kawabata, Toshihiko Matsuka	４．巻 -
２．論文標題 Aizuchi as a sign of internal information processing and its interpretations by listeners	５．発行年 2021年
３．雑誌名 2021 Asia-Pacific Signal and Information Processing Association Annual Summit and Conference (APSIPA ASC)	６．最初と最後の頁 380-385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川端 良子	４．巻 91
２．論文標題 会話参加者の知識と参照表現の関係に関する予備的分析 ー日本語地図課題対話を題材にしてー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会	６．最初と最後の頁 74-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11517/jsaislud.91.0_14	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川端 良子	４．巻 32
２．論文標題 音声言語の定量的分析のためのELANの利用について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 計量国語学	６．最初と最後の頁 506-514
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24701/mathling.32.8_506	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川端　良子	４．巻 4
２．論文標題 地図課題対話における参照導入方法の特徴	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語資源活用ワークショップ発表論文集	６．最初と最後の頁 139 - 148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00002562	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 川端良子，吉田悦子
2．発表標題 共有信念の更新と構築:課題達成プロセスに特化する言語表現
3．学会等名 日本英語学会第 39 回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 川端良子
2．発表標題 日本語地図課題対話における名詞の引用
3．学会等名 2021年度日本認知科学会第38回大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 川端良子
2．発表標題 『日本語日常会話コーパス』にみる主題変更の方略
3．学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」VII
4．発表年 2022年

1．発表者名 川端良子
2．発表標題 会話参加者の知識と参照表現の関係に関する予備的分析 ： 日本語地図課題対話を題材にして
3．学会等名 言語・音声理解と対話処理研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 川端良子，松香敏彦
２．発表標題 不確定な対象の対話への導入方略
３．学会等名 人工知能学会全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 川端良子
２．発表標題 参照における相互認識達成のための方略に関する検討
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 川端良子
２．発表標題 地図課題対話における参照導入方法の特徴
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ2019
４．発表年 2019年

１．発表者名 川端良子
２．発表標題 地図課題対話における参照対象の導入形式
３．学会等名 日本認知科学会第36回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshiko Kawabata, Toshihiko Matsuka
２．発表標題 On the Relationships Between Spoken Instructions and Task Executions in Japanese Language.
３．学会等名 Psychonomic Society's 60th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関